



わたしたちの郷土川越展「自由研究の部」新設

はじめに

今年で29回を数える「わたしたちの郷土川越展」が、11月4日から12月10日まで、12月1日の「川越市民の日」をはさんで開催されました。博物館のギャラリーには、川越市内の小・中・特別支援学校の児童生徒のすばらしい絵画作品が飾られ、今年は、初の試みとして「郷土にまつわる自由研究」を展示することができました。

本稿では、この第1回「自由研究の部」の展示を機に、「わたしたちの郷土川越展」を改めて紹介させていただきます。

1. 「わたしたちの郷土川越展」とは

この展示は、博物館開館以前の準備室の時代から始まり、名前を変えながら引き継がれてきた博物館にとって歴史のある事業です。

川越市では、図工・美術科で長く行われている「郷土を描く美術展」に各学校で取り組んでいます。この取り組みの中から学校には新たな負担無しで作品を募集し、子ども達の作品の発表の場として博物館を活用してもらったものが本事業の始まりです。

川越市の子ども達にとって「郷土」とは川越市を指します。12月1日の「川越市民の日」にご来館いた

だいた他地域の方々にも、子ども達の絵を通して「川越にはこんな地域があるんだ」ということを広く知ってもらい、川越市を紹介することもこの事業の大きな役割の一つです。

実際に子ども達の作品を見てみましょう。



写真1 高階北小学校1年生
「時の鐘」

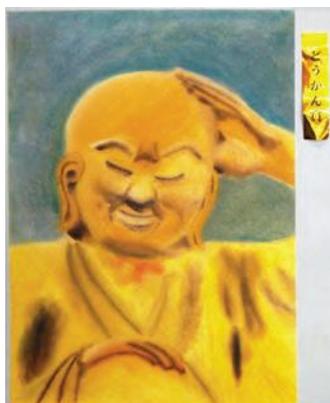


写真2 特別支援学校3年生
「頭をかく人」



写真3 南古谷小学校5年生「田んぼがたくさん南古谷」



写真4 大東中学校3年生「南大塚のもちつき踊り」

いわゆる「川越といえば」という文化財(写真1, 2)があるかと思えば、地域の風景を描いたもの(写真3, 4)まで見るすることができます。

このような展示は、ご来館いただいた方々に川越市の多様な風景を知っていただく機会となるとともに、子ども達にとっては小学校低学年のうちから地域を観る目を育み、川越市の風景や文化財を通して郷土・川越に愛着をもつきっかけになってきたことでしょう。

2. 「自由研究の部」を新設した理由

一頃までは、子ども達の夏休みの宿題といえば、絵日記や読書感想文、そして自由研究が花形であり必須の課題でした。当館でも以前は、「全ての教科に対応した学習サポート」というコンセプトのもと、理科を始めとした自由研究の調査相談である「夏休み自由研究相談会」を行っていました。この相談会は現在では行われていませんが、参加者が極めて少なくなったという事情があったようです。

こうした背景には、学校現場において、夏休みの課題を精選する中で自由研究を課さなくなった学校が多くなったこと、また、夏休みの課題を選択制にする学校が増えたことにより、子ども達にとっても数ある夏休みの宿題の選択肢の中から、わざわざ手間のかかる自由研究に取り組まないという実態があるのだと考えられます。さらにその自由研究の受け皿は「理科展」のみという現状です。これでは、子ども達が社会科学の分野への興味関心を高め、自己の問題を探求・解決していく機会を逸してしまうことになるでしょう。

このことは歴史的な背景や多くの文化財をもつ川越市にとって大変残念なことです。近隣では市の社会科学教員が主体となって実施していた旧上福岡市からの歴史を引き継ぐふじみ野市や、郷土館が主催する飯能市などがあります。また、新規事業として千葉県松戸市立博物館が同じく博物館主催で「松戸市立博物館アワード」として平成28年度より開催を始めています。わたしたち川越市でも社会科学分野での自由研究の受け皿を設けたいと考えました。

3. 「自由研究の部」の作品紹介と展示手法

このような思いから自由研究の部の募集を行い、第1回の展示を行うことができました。今回の入賞作品を表1に掲げます。

本来、自由研究とは子ども一人一人の個性や興味関心を大切にし、長期の休みでしかできない課題に取り組んだり、自主的・自立的な学習意欲や態度を育てたりすることを目的としています。歴史に関する研究となると、どうしても文献資料を写してまとめた作品になりがちですが、自分の足で資料や写真を集め、現地に赴き所感を得て、自分の考えをまとめるという優れた作品も見受けられました。自らの課題について探究する子ども達の姿が見て取れます。

初の「博物館長賞」に輝いた作品は、南古谷小学校



写真5 博物館長賞の作品

6年生による「川越と東京 同じ地名比べてみた！」(写真5)でした。この作品は、川越市にある「霞ヶ関」という地名が東京にもあることに興味をもち、その他にもその様な地名があるだろうかと興味を抱き、現地調査と両地点の比較を行っています。歴史の教科書に出てくるような事象のみならず、身の回りに疑問の種がたくさんあり、興味をもったことを夏休みの時間をかけて追究することの大切さ・面白さを感じてもらえる良作であったと思います。

他にも、調べたことを丁寧な字で記して巻物の形にまとめた作品(写真6)はとても見栄えが良かったですし、自分の興味ある旧車を地域で見つけ記録にまとめたレポート(写真7)からは趣味を追究する姿勢が見られ、川越城にまつわる新聞(写真8)は歴史的事象と自分との関わりを挙げながらまとめる王道的な作品となっていました。

子ども達にとって自分が仕上げた作品が「博物館に展示される」ということは大きな自信に繋がることでしょう。さらに常日頃から資料を展示することが専門

の博物館ですから、子ども達の作品にも敬意を払い、展示のための台や器具などを用いて雰囲気を出すことも心がけました。本来ならば展示室で展示したり、展示ケースに入れて展示したりするとより一層の雰囲気が出ると思いますが、読み物作品が多かった関係で自由に手に取れるようケース外としました。



写真6
南古谷小学校6年生「川越街道の巻」



写真7
名細小学校5年生「川越市と川越市周辺の旧車」



写真8 川越小学校4年生
「川城新聞
北条氏康
川越城を救う！」

作品名	学年
川越と東京 同じ地名比べてみた	6年
川城新聞 ～北条氏康川越城を救う！～	4年
時のかね	5年
生活圏における川越歴史点検	6年
ぼくが住むまち 川越の歴史	3年
小江戸川越 小江戸佐原	5年
時のかねの歴史と模型	6年
川越街道の巻	6年
川越まつりについて	5年
川越市と川越市周辺の旧車	5年

表1 入賞作品の内容

おわりに

当館の歴史と共に歩んできた郷土展。今年新たに始まった自由研究の部が、子ども達にとって自らの郷土を見つめ、地域を愛するきっかけになることを願ってやみません。また来年も素晴らしい作品が目に見えることを楽しみにしています。

(教育普及担当 寺内和広)

蔵造り資料館耐震化工事について

蔵造り資料館とは

市内幸町に所在する蔵造り資料館（写真1）は、たばこおろしぎょう煙草卸業を営んでいたこやま小山家の屋敷で、明治26年（1893）3月17日の川越大火直後、ぶんぞう小山文蔵によって耐火性の高い土蔵造りで再建されました。昭和46年に民間企業に所有が移った後、市民からの保存を求める声を受けて川越市土地開発公社が買収し川越市へ移管、昭和52年に「蔵造り資料館」としてオープンしました。その後明治期の川越の伝統的商家の姿をよく留めていることから、昭和56年に店蔵・添屋が「旧小山家住宅」の名称で市の文化財指定を受け、平成27年には残る全ての建物が追加指定となりました。

旧小山家住宅を構成する建物（図1）

蔵造りの町並みとして知られる一番街に面して大小2棟の土蔵建築が並んでいますが、大きい方は店舗として使われた店蔵です。小さい建物は貸店舗等に利用された添屋と考えられており、明治35年発行のさいたまけんえいぎょうびらん「埼玉県営業便覧」には「てつものしょう鐵物商」と記載されています。

古いレンガ塀で囲まれた約675㎡の敷地内には、店蔵に接して2階建ての住居棟があります（現存するのは一部）。その奥は一番蔵（文庫蔵）、井戸を挟み二番蔵（煙草蔵）、三番蔵（文庫蔵）と続きます。さらにその奥には便所棟があり、敷地南西の隅には溶岩を用いた基壇上に屋敷敷である稲荷社が鎮座しています。また、店蔵南に接するアーチの門から続くレンガ塀が敷地の南と西を区画し、一番蔵の北側にもレンガ

塀が設けられています。

店蔵は明治の大火直後の4月に上棟じょうとうされており、外壁を黒漆喰で仕上げた2階建て、切妻造り平入きりづまづく棧瓦葺ひらいりさんがわらぶきの建物です。現在の棟は熨斗積みとなっていますが、当初は箱棟はこむねでした。また店蔵2階の開口部を観音開きとし、霧除けを設けている点が特徴的です。

小山家（屋号「万文」）について

万文の前身は万屋よろずやといい、幕末の頃に煙草商を始めたようです。明治期の万文は水戸地方の葉煙草を原料にして刻み煙草を製造・販売していました。その店舗も明治26年の大火で焼失しますが、小山家4代目の文蔵によって再建され、万文も最盛期を迎えます。文蔵は川越商業会議所の設立にも奔走し、明治33年に会議所が認可されると、常議員として活躍しました。

明治37年（1904）に煙草の製造・販売は専売制になりますが、万文は「たばこもとりのさばきにん煙草元売捌人」の一人に指定され、煙草卸商に変わりました。

文蔵が亡くなると、子の三省みつみが万文を継ぎます。昭和6年には煙草売渡制によって、煙草を販売できる営業所が一郡一人に限定されますが、三省はこの川越営業所に指定され、川越地方の煙草販売に尽力します。その後、三省は東京地方局煙草販売所の設置に協力し、店舗を貸与して煙草卸商を廃業しました。

このように、万文は専売制が布かれる明治37年以前は煙草販売業として活躍し、専売制以後も大手煙草問屋として業績を上げていったのです。

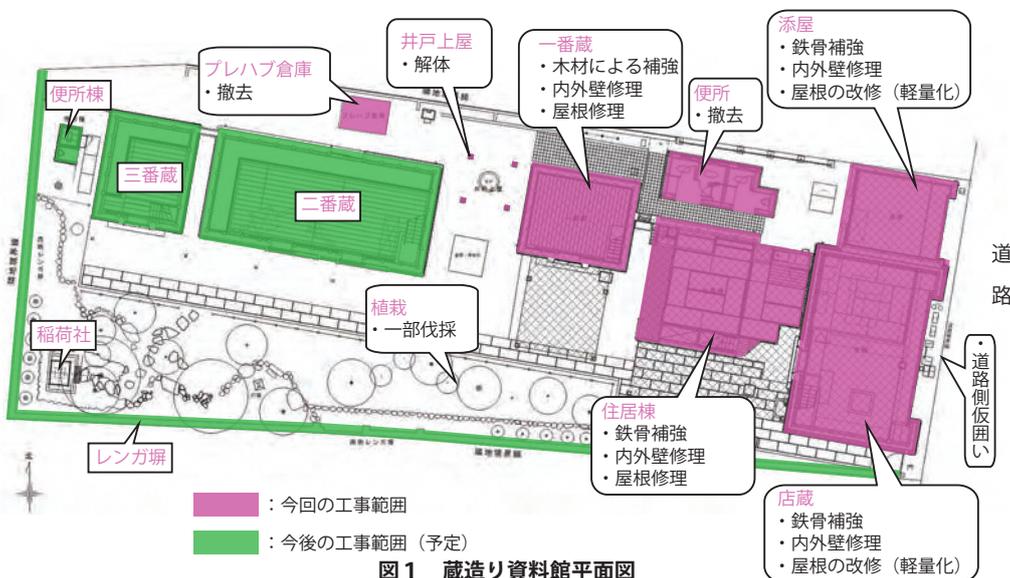


図1 蔵造り資料館平面図



写真1 工事前の蔵造り資料館外観（正面：店蔵、右手：添屋）

蔵造り資料館耐震化事業について

平成26年度に蔵造り資料館の耐震診断調査を実施したところ、耐震補強が必要であることが判明しました。そこで入館者の安全確保と文化財建造物の保存を図ることを目的とし、まずは店蔵ほか3棟の建物から耐震補強工事を実施することになりました。

工事は平成29年度・30年度の2カ年で店蔵・添屋・住居棟・一番蔵の耐震補強を中心に工事を実施します(図1のピンク色の箇所)。

工事では鉄骨や木材による補強を行うほか、屋根の軽量化や内外壁の修理も行います。鉄骨による補強は元の部材を痛めることがなく補強することができ、また容易に外して旧状に復することが可能であるため採用されました。工事後は一部の鉄骨が露出してしまうものの、目立たない色や位置になるよう配慮します。

工事で新たな発見！

平成29年12月時点では、店蔵・添屋・住居棟の解体が進み、コンクリート土間の解体や鉄骨による地中梁を^{ちちゅうはり}設置するための^{ねぎり}根伐作業が行われています。

土間を解体すると、店蔵・添屋それぞれの北東隅に石敷きが新たに検出されました(写真2)。この石敷きは、火事の際に店舗開口部を塞ぐために使われる^{つちど}土戸(防火戸)の保管場所と想定されます。土戸は下屋の戸袋に収納される例もありますが、店蔵と添屋には戸袋がありません。いざ火事の時にすぐ使えるよう、



写真2 店蔵(左)・添屋(右)で検出された石敷き(西から撮影)



←写真3 添屋南側の受玉石と西側のローソク地形(東から撮影)

ローソク地形は、支持地盤がやや深い場所で使われる地形です。玉石で底部を固めた後、直方体のローソク石を縦に入れて建物の荷重を下地の地盤に伝えます。写真よりも深く掘ると、ローソク石の下に受玉石が見えてきます。

店舗の一角に重い土戸の荷重を支えられる石敷きを施して保管していたのでしょう。

地中梁設置予定箇所の掘削では、店蔵・添屋を支える基礎構造や、改装の痕跡が見えてきました。

店蔵では柱の位置に割栗石を入れて突き固めた^{わりぐりいし}地形が確認できました。一方の添屋では地形の方法が異なり、北～西側の壁は柱の位置にローソク地形を施し、店蔵と接する南側の壁は大きな^{うけたまいし}受玉石を入れた地形であることが判明しました(写真3)。建物によって異なる手法が使われている理由は今後の検討が待たれますが、地盤の差異や建築時期の違い(店蔵の後に添屋が造られたようです)がカギとなりそうです。

改装の痕跡としては、店蔵の北半分の土間から切石と玉石を一定間隔で並べた痕跡が見つかりました(写真4)。これは^{ちようば}帳場があった^{つか}座敷の^{ねいし}束を支える根石と考えられます。

添屋では西側出入口付近の、柱が無い位置にローソク地形が行われた箇所が見つっています。これは、既存の柱と壁を一部撤去し、出入口の間口を広げる改装が行われた証拠といえるでしょう。

工事が進むにつれて、今後も新たな発見が予想されます。全ての耐震化工事が終了した後は、これらの成果も展示等の形で公開することになります。ご期待ください。

(学芸担当 平野寛之)



写真4 店蔵内部に並ぶ根石(南東から撮影)

矢印が根石検出地点。破線は根石があったと推定される箇所。各根石の上面は、最大17mmの差で高さ(標高)がそろっていました。

七夕のまこも馬をめぐって

当館では、毎年7月に子ども体験教室「ミニまこも馬作り」を行っており、本年は15名の子ども達の申し込みを得て実施しました。かつて七夕の行事において各地で盛んに作られていたまこも馬は、最近ではほとんど目にすることができなくなりました。ここでは、このまこも馬について取り上げてみたいと思います。

まこも馬とは

まこも馬の材料となるまこもは、漢字では真菰、真薦と書き、別名はなかつみとも言われます。イネ科の大型多年草で、川や沼地などの水辺に生え、葉は稲のように細長く線形をしており、高さ1～2mにもなります。その葉を利用して^{むしろ}蓆を編んだり、^{ちまき}粽を巻いたり古くから利用されており、「古事記」や「万葉集」といった文献にも記載があります。水質浄化や防菌効果があることも知られ、神の宿る神聖な草として神社の御神体や神事、しめ飾りなどにも利用されています。

また、黒穂菌^{くろぼ}がついて茎の部分が竹の子状になったものをマコモタケや菰角^{こもづの}と言って食用としたり、さらには熟して黒くなったものを眉墨やお歯黒の原料として使うなど、様々な用途として利用され、不要な部分がほとんどないほどの植物となっています。

このまこもの葉を利用したまこも馬は、7月7日の七夕の行事に関わりがあり、^{たなぼたうま}七夕馬とも呼ばれます。七夕といえば、^{しよくじよ}織女（^{おりひめ}織姫）と^{けんぎゅう}牽牛（^{ひこぼし}彦星）が年に一度めぐり逢う天の川の伝説と裁縫の上達を願う^{きつこうでん}乞巧奠という中国から伝えられたものがあり、日本古来からの水辺の^{はたや}機屋を祭場とする^{たなぼたつめ}棚機津女の伝説によるものが合わさった水に関する伝承とともに、お盆の行事とも深い関係があるといわれます。

まこも馬は、祖先の霊を迎えるための乗り物や除災の意味から、七夕で飾られるようになったと考えられ、東日本を中心に各地に伝えられています。ほとんどが馬ですが、千葉県に見られるように馬と牛を一緒に作る所もあります。馬の形や飾り方、行事の意味合いなどは地域によって異なる特徴がみられます。

体験教室の実際

今年度は7月8日（土）に実施しました。かつて身近な水辺に当たり前のように自生していたまこもは、今では中々なく、当館では、^{まつごう}松郷地区の水利組合が管

理する用水路に群生するのを刈らせていただいています。今年は^{よしまち}葭町揚水利組合にご協力いただきました。

実施の10日程前に刈り取りを行い、葉の下処理を行います。数日置いて博物館ボランティアの方々に協力いただき、馬の使用部材毎に合わせた長さに切り揃えます。この作業は手間がかかりますが、教室当日の製作がスムーズにいくようにするため欠かせません。また、家庭での利用を考慮して、4～5分の1の大きさに作れるよう配慮しているためでもあります。

当日は、元職員に指導をいただき、まこも馬の歴史を学んだ後、早速雄の馬作りに取り掛かりました。初めのうちは慣れない手つきで苦戦していましたが、まこもの葉を束ね、そして曲げ、まこも縄で縛り留めながら作り上げていくと、ついにはオリジナルの雌雄一対のミニまこも馬が完成しました。

子ども達からは「むずかしかったです。でも上手に作れてよかったです。また作りたいと思いました。」「かっこいいしっぽができました。」「たのしくって、こんなすごい思いもしてませんでした。」など、製作を通じて生き生きとした感想をもらうことができました。



7月8日実施
子ども体験教室のようす



群生するまこも
(川越市松郷地区)

まこも馬の再現とまこもに係る新たな試み^{かか}

川越における馬を飾る習俗は、昭和30年代までは稲作地域を中心に行われていましたが、平成6年度から3年間に亘る教育委員会の年中行事調査の段階で、村方の調査対象地域の16戸中わずか3戸、町屋では5戸中ゼロと急速に減少し、今に至ってはほとんど目にすることがなく、作り手も大変少なくなっています。

しかし、別の調査で南古谷地区の^{しぶい}渋井地域で七夕馬が飾られる事例があったことから、体験教室後にまだ行っている可能性があるのではないかと現地を訪ねた

ところ、偶然にも当時の製作者、程島満喜さんにお会いすることができました。お話では現在ほとんど行っていないとのことでしたが、特別に製作していただくこととなり、まこも馬が最後に飾られてから3年ぶりに観音堂に飾られることになったのでした。まこもは博物館で急遽用意し、御自宅で製作いただき、その風景を映像と画像で記録することができました。

8月6日の渋井の夏祭りに訪ねると、観音堂の軒先に飾られており、まこもの草丈全体で作られた馬はとても迫力があり、馬の持つ霊力が感じさせられるものでした。今回限りのまこも馬作りでしたが、貴重な機会に恵まれ、この場をお借りしてお礼申し上げたいと思います。



観音堂に飾られたまこも馬



まこも馬作りを行う程島さん

さて、この一方で、まこもにかかる新たな試みが川越では始められています。高梨農園、かわごえ里山イニシアチブの2団体が協力して栽培指導者の下で3年前からマコモタケ作りを行っているのです。試行錯誤を重ねながら生産に取り組み、まこも茶や乾燥マコモタケの開発、マコモタケを使った料理レシピの工夫など、積極的に活用の可能性を広げています。

また、生産や販売だけでなく、まこもを使用した正月飾りやまこも馬作りなどの活動も併せて実施しており、博物館と立場やアプローチに違いはありますが、まこもの文化にも着目しながら活動につなげている事例は、まこものこれからの在り方を考えていく上で大変参考になるものではないかと思われます。



マコモタケ (谷道輝夫氏 提供)

古くから受け継がれた人々の生活の営みや思いが伝わるこの素朴で味わいあるまこも馬の伝統を、少しでも絶やさぬように、博物館としても継続して取り組んでいきたいと思ひます。(教育普及担当 峯岸太郎)

Information

平成29年度の博物館行事です (3月まで)

展覧会・講座・教室 etc

- …一般向け事業 開催日・講座名
- …子ども向け事業 内容・申込開始日

1月	<p style="text-align: right;">← 13日(土)～ 第28回 むかしの勉強・むかしの遊び展</p> <p>○13日(土) 子ども体験教室 まゆ玉飾りを作ろう</p> <p>●27日(土) 大人体験教室 縄文土器作り教室</p>
2月	<p style="text-align: center;">第28回 むかしの勉強・むかしの遊び展 ~ 25日(日) →</p> <p>○10日(土) 子ども体験教室 むかしの道具を使ってみよう</p> <p>●11日(日) 博物館歴史講座 川越の近世①</p> <p>●11日(日) むかし展関連事業 なつかしい昭和の自動車</p> <p>●18日(日) 博物館歴史講座 川越の近世②</p> <p>○17日(土) 子ども体験教室 むかしの道具を使ってみよう</p> <p>●25日(日) 博物館歴史講座 川越の近世③</p>
3月	<p style="text-align: left;">← 17日(土)～5月13日(日) 第27回 収蔵品展 三芳野神社とその社宝 (仮題)</p> <p>○3日(土) 子ども体験教室 弥生機で真田ひもを織ろう</p> <p>○10日(土) 子ども体験教室 和紙作りに挑戦</p> <p>○17日(土) 子ども体験教室 わら細工に挑戦</p> <p>●24日(土) 収蔵品展関連事業 資料解説</p> <p>●25日(日) 収蔵品展関連講演会 三芳野神社とその文学</p>

第28回「むかしの勉強・むかしの遊び」展

会期 平成30年1月13日(土)～2月25日(日)

毎年開催している「むかしの勉強・むかしの遊び」展も、第28回となりました。今年度も、昭和30～40年代を中心とした教室・居間・台所や駄菓子屋の店先を、当館の収蔵資料から再現しています。地域の人々の暮らしがどのように変化してきたか、移り変わりが感じられる展示です。

今回は、実際に「触れる展示」として、教科書や生活用品などを入り口付近に配置しました。さらに、夏の寝室の大定番(季節は違いますが…)「蚊帳」が皆さんを待ち受けます。期間中には、たくさんの小学生が見学を訪れますが、ご家族でもぜひ来館していただきたいと思います。

親・祖父母世代にも懐かしんでいただける展示となっていますので、ご家族の会話が弾むこと間違いなしです。



昭和30～40年頃の教室の様子

利用の御案内

◆入館料

区分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	共通入館(観覧券)		
				●博物館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●美術館 ●まつり会館
一般	200円 (160円)	100円 (80円)	休館中	300円	370円	600円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	休館中	150円	180円	400円

※()内料金は、団体[20名以上、1名につき]の場合

◆交通案内

東武東上線・JR川越線 川越駅より
または西武新宿線 本川越駅より、
●東武バスにて「蔵のまち経由」乗車札の辻バス停下車徒歩10分、または「小江戸名所めぐり」乗車博物館前バス停下車すぐ
●イーグルバスにて「小江戸巡回バス」乗車博物館・美術館前バス停下車すぐ
※御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。



◆開館時間 午前9時から午後5時まで(ただし入館は午後4時30分まで)

◆休館日 月曜日(休日の場合は翌日の火曜日)

第4金曜日(休日を除く)年末年始(12月29日～1月3日)
館内消毒(6月下旬)特別整理期間(12月下旬)

*開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿とも原則として同じ(館内消毒・特別整理期間は博物館のみ休館)

*蔵造り資料館は、耐震化事業のため平成29年7月1日から平成31年3月末(予定)まで休館いたします。

◆ガイド ○博物館 平日(開館日)午前11時・午後2時 土・日・祝日 午前11時・午後1時・午後2時・午後3時
※予定を変更させていただく場合もありますので、ガイドを御希望の方は、博物館までお問い合わせください。

○川越城本丸御殿 毎月第2・第3日曜日 午前11時・午後2時 ※事前のお申し込みはいりません。当日直接おこしください。

◆機織り実演・体験(協力:博物館同好会)

○博物館 毎週火・水曜日 午後1時～3時 華の会(裂き織り)

毎週木・土・日曜日 午前10時～午後3時(12時～1時はお休み) 川越唐棧手織りの会

※予定を変更させていただく場合もありますので、御希望の方は博物館までお問い合わせください。



1月							2月							3月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6	4	5	6	7	8	9	10	4	5	6	7	8	9	10
7	8	9	10	11	12	13	11	12	13	14	15	16	17	11	12	13	14	15	16	17
14	15	16	17	18	19	20	18	19	20	21	22	23	24	18	19	20	21	22	23	24
21	22	23	24	25	26	27	25	26	27	28	25	26	27	28	29	30	31			
28	29	30	31																	

○印は、2館休館
(博物館・本丸御殿)

博物館の最新情報をパソコン又は携帯電話へ配信します

メール配信を希望される方は、川越市ホームページのオンライン「メール配信サービス」から「博物館メール配信」の登録を行ってください。携帯電話では、右のQRコードから登録の手続きができます。毎月25日に最新の情報を配信します。

※登録料および情報提供料は無料ですが、インターネット接続やメールの受信等にかかる費用は利用者の負担となります。



発行日◆平成29年12月12日 発行◆川越市立博物館

〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1

TEL 049-222-5399

FAX 049-222-5396

Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp

ホームページ http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/